

ECFA後を見据え、 台湾拠点の機能強化を展望する日華化学

台湾をアジア繊維事業の中心拠点とし、新しいビジネスの生まれる場所にする。そんな力強い事業展望を描くのは、福井市に本社を置く日華化学だ。一般に界面活性剤と呼ばれる繊維用工程・機能性薬剤の大手で、日本では約3割の市場シェアを持つ。1960年代に台湾へ進出し、台湾日華化学工業(本社・台北県板橋市)を設立。以降、台湾繊維産業の高度成長、生産拠点の中国シフト、繊維の高機能化、界面活性剤のECFA(中台経済協力枠組協議)のアーリーハーベスト(早期関税引き下げリスト)入りなど、様々な環境変化に対応しながら、40年に渡って台湾でビジネス展開してきた。今回は台湾日華を訪ね、華南・ベトナムに広がる事業ネットワークやECFAを活用した事業展望についてお話を伺った。



台湾日華化学工業(股)総経理 詹哲茂氏(左)
同副総経理 円道亨氏(右)

社名の由来と台湾日華について

日華の創立は戦前に遡ることができます。繊維油剤や食品製造用のアミノ酸を製造していた前身の会社が1938年にアミノ酸の中国(中華民国)へ輸出を始めたことから中国との関係が生まれました。その後、戦争という時代背景の中で、「日中の架け橋」となる企業を目指して、1941年に日華化学工業(後に日華化学へ社名変更)が設立されました。

台湾日華(以下当社)は1968年に現地資本との合弁で設立されました。継続している海外拠点の中では、最も長い歴史を持ちます。

当社は主に、台湾の繊維産業向けに、精練～染色～仕上げに至る加工工程に用いる薬剤(界面活性剤)を供給しております。繊維事業以外では、製紙や金属の工程・機能性薬剤の生産も行っています。今後は台湾が大きな市場を持つ電材事業も拡大させていきたいですね。日本ではハウスホールド、コスメ、製紙といった繊維以外の事業が売上の半分以上を占めています。台湾でも市場・産業の動向を見極めながら、政府が推進する産業イノベーションの中に上手く入っていきたいと考えております。

貴社の強みについて

繊維の加工工程薬剤は日華グループの主力製品であり、日本ではシェアが3割に達するほどの競争力を持ちます。

この製品を、本社のバックアップを受けながら、台湾で展開できることは大きいですね。もちろん、当社のビジネスは規格化された製品を顧客へ渡して終わり、というものではありませんので、台湾人のスタッフが、顧客に応じた技術サポートやカスタマイズをしっかりと行っていることも、台湾日華の競争力の基礎となっています。

人材而言えば、当社は勤続20年を超える社員が全体の4割を占めており(10年以上は約7割)この定着率の高さが、技術や経験の蓄積を生み、お客様の信頼獲得にもつながっているものと考えております。

台湾日華の海外ネットワークについて

台湾の繊維産業においては、第二次石油ショック(1979年)の後、生産拠点を中国へ移す動きが加速しました。現在はさらにタイやインドネシアといったアセアン諸国にも生産拠点が広がっています。日華グループでは、こうした繊維産業の中国・アセアンシフトに合わせ、この地域でのネットワークを広げていきました。海外拠点のうち、香港(販社)、広州、浙江、ベトナムの各社には台湾日華の資本が入っており、オペレーションの責任者を台湾から派遣しています。これらの地域には台湾系の取引先が多く、華人同士のネットワークも重要です。そこで、台湾主導の事業体制を採ることによって、より効率的な経営が可能となっています。

日本企業から見た台湾

経済部と交わしたLOI(投資同意書)について

当社は去る9月21日に開かれた「台湾投資サミット(台湾経済部主催)」において、一時凍結していた新工場の建設を再開させ、ECFAの調印によって新たに生まれるビジネスチャンスを活用しながら、台湾経済の発展に寄与する旨の同意書を交わしました。

現在の工場は手狭になっており、都市化の進行で拡張が難しいことから、桃園県(桃園科学工業区)への工場移転を決めております。ここでは繊維用だけではなく、電気・電子、環境市場関連の工程薬剤及び機能薬剤の開発、製造、販売を行っていきます。

ECFAに関しては台湾から中国への輸出拡大を検討しています。これまで、中国から日本に素原料を輸入し、日本で製造した薬剤を中国に輸出するという流れがありましたが、関税の面からも物流の面からも、最適なスキームであるとは言えませんでした。今後はECFAにより、中国 台湾 中国の物流が非関税で行えるようになるため、台湾製薬剤の競争力が高まることになるでしょう。また、中国の台湾系企業にも「台湾製の界面活性剤をそのまま使いたい」というニーズがあります。

さらに、今後は台湾の開発機能も強化させていきます。具体的には、繊維加工用薬剤の先端技術の応用研究を台湾で行います。台湾政府、企業の繊維に対する取り組みは日本よりもずっと積極的です。また、台湾の繊維産業の競争力は高く、企業は世界中に生産拠点を持っています。つまり、台湾で開発、生産を行えば、世界中に販売することができるわけです。

台湾を軸とする上記のスキームが動き始めれば、台湾日華は文字通り、アジア繊維事業のマザーブランドとなることでしょう。

何故台湾は貴社海外事業のハブとなりうるのでしょうか

台湾日華は今後、新製品のマザーブランド R & Dの拠点 新しいビジネスの起点という三つの役割を担ってまいります。

なぜ台湾か、というお話ですが、日本の繊維産業が衰退していく中で、グループ全体の中でどの拠点が本社に代わる生産拠点になりうるか、このことを考えた時、技

術力や信頼性(社内での秘密保持の高さなど)国民性などを総合的に勘案したところ、日本に代わる、或いは、日本をフォローできるのは台湾、という結論に達しました。繊維産業は成熟期に入って久しく、主要生産地は日本から台湾・韓国、中国と移っています。台湾市場は今後、大きな成長は見込めませんが、それでも、規模としては日本の倍近くあります。また、経済部統計処の紡織業生産指数を見ますと、金融危機で落ち込んだ後は2006年の水準まで回復してきており、産業基盤の力強さをうかがうことができます。さらに、台湾の繊維産業には、単にマーケットの大小だけでは計ることができない強さがあります。それは「品質」と「コスト」と「デリバリー」のバランスです。顧客から急な受注が入った場合でも、地理的な優位性に加え、地場の商社や物流会社の手際の良さから、国内外からスピーディに原料調達を行うことができ、また、製品を外に出すことができます。

このバランスの良さに加え、台湾人の誠実さと強い繊維企業があるからこそ、台湾でビジネスを続ける判断ができるわけです。今後は、台湾の繊維加工薬剤市場でのシェア拡大を目指すとともに、新しい事業分野の開拓も行ってまいります。台湾はITハード立国として世界有数の産業基盤を持つだけではなく、「六大新興産業(グリーンエネルギー産業、バイオ産業など)や「四大スマート産業(スマートグリーン建築、電気自動車など)など、ビジネスの種がたくさんあります。台湾で新しい応用製品の開発、生産を行っていくべく、政府機関や台湾企業との提携機会を積極的に模索していきたいですね。

ありがとうございました

台湾日華化学工業股份有限公司の基本データ

会社名	台湾日華化学工業股份有限公司
設立	1968年
董事長	江守康昌
資本金	3.78億元
社員数	81名(内日本人3名)
事業内容	界面活性剤の製造・販売

注)2010年11月時点のデータによる。
出所)公開資料及びヒアリングよりNRI整理